このリトルマガジンが、すごい！

すべての雑誌好きに、特に「最近の雑誌はどれもこれも似ていてつまんねーや」と飽き飽きしている方々に捧げる大特集

「オレたちの読みたい雑誌がないから、この際作ってやれ」という動機で、椎名 誠たちは『本の雑誌』を創刊した。今から、30年も前のことである。その後、何十、何百の志を持った小部数誌＝リトルマガジンが現れ、消えて行った。そして、21世紀。雑誌メディアの衰退が指摘され、何かの真似のそのまたコピーみたいな雑誌ばかりの今こそ、「だったら、自分たちで作ればいいじゃん！」と新しいメディア作りに奔走する人が少なからずいる。伝説のイラストレーターが雑誌を立ちあげた理由から、『小説すばる』編集部イチオシの編集長インタビュー、そして〝'06年のリトルマガジン状況〟まで盛りだくさん！ 〝ちょっと古臭い、でもまだ未来はある〟。そんな雑誌というメディアを溺愛する方への特集です。

集まり、読者は四月と十月という、一年で気持ちの良い季節に、贅沢な展覧会に訪れた気持ちになる。ちなみに表紙デザインは、数年ごとに同人たちが持ち回りで担当するそうで、表紙の裏表もキャンバスと化す。本号の担当はイラストレーター川原真由美。

ユトレヒトは国内外のアート、写真、デザイン、絵本を中心に新刊／古書を取り交ぜたセレクトのブックショップです。

他のブックショップやスペースのディレクションも数多く手掛け、独自の視点で選んだ書籍のディストリビューションも行っています。

タコシェ　中山亜弓

タコシェは、東京・中野にある、一般流通にのらない本・いわゆるミニコミや自主制作盤、雑貨などを扱う小さなお店です。93年のオープン当時はネットも携帯もまだ普及しておらず、学生さんからお勤め人まで、多くの方がコピー誌を持ち込まれていましたが、いまや発信の場はブログにとって代わり、個人が世界中と平坦な編み目状につながった結果、自費出版の世界は先細り…と思いきや、意外や、人間本来の身の丈にあった内容規模の表現ツールとしての小出版が目にとまるようになってきました！

たとえばメディアアレイビスト・宇川直宏と批評家・佐々木敦の対談を巻頭に据えた談話誌『nu』。一般に対談記事は会話が刈り込まれてひとつの落とし所に着地すべく構成されるのに、これは刈り込まれるべき部分を残して会話ならではの無軌道と脱線・飛躍の軌跡を記録したライブ盤みたいなもの。

一方の脳から出た言葉がもう一方の脳に入ってダジャレやら真裏の言葉を分泌させちゃう会話という脳の不思議な競技の容れ物に、会話量を紙の量や本の厚みで視覚化したうえにパッケージできる雑誌というハンディな形が絶妙にマッチしているのです。今はなき喫茶店・談話室滝沢にかわる（？）会話のハコ、そんな風に捉えてみました。

『てくり』はキャッチフレーズに〝盛岡の「ふだん」を綴る〟とある通り、地元の織物職人さんの仕事や日常に密着取材して、特集の柱にするなどピンポイントかつディープな内容。充実した生活を送る一職人の視点を通して、現在のファッションから盛岡のスウィーツ情報までもが見えてくるという、点を極限まで絞り込むことで、その針穴の先に広い世界が像を結ぶ〈盛岡∞世界〉な現象がおこるのです。

この徹底した掘り下げが観光旅行やネットで拾えない地方の物語を堪能させてくれるわけですが、これは地方文化の豊かさの現れというより、コンビニが日本中にできて、地方独自の景色や文化が失われてゆく中での、自分探しならぬ地方探し現象かもしれません。各地で地元の生活者目線の雑誌が出てきているのです。

そんな雑感はさておき、地方のおいしいものを取り寄せるように、ネットで地域雑誌を見つける。この合わせ技こそ今後の読書術のポイントになると思います。

最後にご紹介するのは『野宿野郎』。タダ泊まりの裏技や安宿がある中で敢えて野宿。

いや、むしろ宿やルートや予定に縛られない旅（＝人生）の豊かさを提言する逆転の発想がこの本にはあります。勧め人をやりつつ野宿で自然に戻って五感をリセットしたり、デートに取り入れてお互いの非日常面を見たり、野草グルメになったり…と。

こうやって挙げてみると、最近、注目のミニコミは、会話、地元、野宿と人間の身体尺度に合っていて、それ以下でも以上でもない。その内容やサイズが、今後、出版の規模や流通をも見直させてくれそうな気がします。

タコシェ　〒164-0001
東京都中野区中野5-52-15中野ブロードウェイ3F
電話03(5343)3010
http://www.tacoche.com/

「てくり」

貸本喫茶ちょうちょぼっこ　真治彩

「貸本喫茶ちょうちょぼっこ」を友人たちとはじめてから丸5年が過ぎた。手持の本を本棚に並べて貸すというスタイルを飽きもせず細々と続けている。自然にミニコミを扱うようになり、今では雨後の筍みたいにむくむくと増えてきて管理するのがすこし面倒になりつつある。けど、ミニコミは「作る人」「売る人」「買う人」の距離が近く、1冊を通していろんな人と関わり、交わることができるのでなかなかやめることができない。

「ちょうちょぼっこ」の4人は趣味が似ているようで異なるので、それぞれのおすすめをここでは紹介したい。

『Dioramarquis』（編集発行所アトリエ箱庭／発行人　幸田和子）

大阪・北浜にある読書カフェ「アトリエ箱庭」が発行する装幀も美しい小冊子。01号では華雪さんの篆刻、未来馨さんの「空中線書局の手製本」、小野原教子さんの「北園克衛とファッション」、オンライン古書店トランプ堂のパリ買付日誌など、箱庭周辺の執筆陣の詩やエッセイ、コラムなどに加え、谷川俊太郎氏へのインタビューや森元暢之氏の漫画も読める。デザインは、『遊』や『Heaven』など多くの雑誌を手がけられている羽良多平吉さん。付録に銅版画家山下陽子さんの美しいカードがついているのもうれしい。（次田）

貸本喫茶ちょうちょぼっこ　〒550-0014
大阪市西区北堀江1-14-21第1北堀江ビル402
電話06(6538)6166
http://www.geocities.co.jp/chochobooks/

『車掌文庫1「二十世紀終わりの夏、私はこんな風に子供を産んだ」』（車掌編集部　塔島ひろみ）

『車掌』は、とうじ魔とうじの妻である塔島ひろみが主宰するミニコミ。字がたくさん。手書き原稿もたくさん。ミニコミの中

「SURPRISE40 特別編集号
鴨居羊子のピンクの言葉」